

令和元年6月27日現在

機関番号：33930

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12795

研究課題名（和文）性同一性障害を有する高校生が自認している性で過ごせる学校環境整備と親への支援

研究課題名（英文）Support for parents of high school students with gender identity disorder (GID) and for schools to prepare an environment where such students can be the gender they identify themselves to be.

研究代表者

藤井 徹也 (Fujii, Tetsuya)

豊橋創造大学・保健医療学部・教授

研究者番号：50275153

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、一般高校生とその親にGIDの生徒を高校に受け入れることに関する意識調査と、高校生活や親との関係性に焦点を当てたGID当事者へのインタビューを行った。調査した一般高校生と親のそれぞれ30.7%がGIDの情報を得ており、高校生の30.1%はGIDの情報を授業で得ていた。また、友人からGIDをカミングアウトされた時に自分ひとりでは受け止められないと48.6%が回答していた。GID当事者へのインタビューでは、カミングアウトによる孤立への不安が聴取された。これらの調査結果から、高校の教職員のGIDに関する知識を向上させ、GIDの高校生および一般高校生から情報を収集し、適切に対処する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、従来から報告されていたGID当事者の孤立への不安とともに、当事者を受け入れる高校生の現状を確認することができたことで、双方への援助の必要性と具体的援助方法を示すことができた。高校でのGIDに関する知識の教授が30.1%であったことから、教職員がGIDの正確な情報を適宜示す必要があることも確認された。さらに、GID当事者の親の受け入れや当事者周囲の高校生の親の現状から、子供が在籍する高校は親への援助も必要であることが明らかになった。よって、本研究は、新たな援助の必要性を示した学術的意義と、GID当事者と親、受け入れる高校生と親への具体的支援を導いたことの社会的意義は大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, a survey regarding the acceptance of students with GID in schools was conducted among high school students and their parents. Interviews with people who have GID focused on their high school life and their relationship with their parents. The survey found that 30.7% of high school students and their parents had received information about GID. Among the surveyed high school students, 30.1% had obtained information about GID in school classes. Moreover, 48.6% of the students answered that they could not handle it on their own if a friend of theirs came out as having GID. The interviews with participants who have GID indicate that they experienced anxiety about isolation resulting from coming out as a person with GID. The results show that it is necessary to improve knowledge regarding GID among high school teachers and staff and to cope with the situation by collecting information from students with GID, as well as from high school students as deemed appropriate.

研究分野：看護学

キーワード：性同一性障害

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

GID を有する者は、近年、若年層において増加傾向にある¹⁾²⁾。平成 25 年に文部科学省が国立私立の小学生・中学生・高校生と特別支援学校の生徒約 1300 万人を対象として行った「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」では、606 件の事例が報告され、その 66.5%が高等学校からの報告であった³⁾。平成 16 年 7 月施行の特例法⁴⁾による戸籍の性別変更等も可能となり、GID である児童・生徒が自認する性を周りが受け入れ、対応することが求められている。しかし、自認する性の公表は、GID 者とその児童・生徒を受け入れる側双方にとって容易でない。また、GID の治療は 20 歳代であっても、親のサポートが必要であるとされている⁵⁾。申請者は、これまでに GID 者が家族内でカミングアウトする相手は母親が多いこと、親が GID を否定し、その結果 GID 者の自殺企図が生じる事例を確認している⁶⁾。同時に親自身も悩み、葛藤する事例が報告されている⁷⁾。それにもかかわらず、現時点では、GID を有する児童・生徒の学校における受け入れや、その親に対する具体的な対応策は示されていない。このため、GID を有する児童・生徒やその親への対応策を考えることが急務である。高校生は身体的な性が完成する時期であり、性自認や性指向など自己や他者の性に対して敏感に反応する時期でもある。そのため、GID 高校生が、治療、学業、日常生活を支障なく過ごすための支援を検討することは重要であり、GID 高校生と一般高校生が良好な関係を構築できる学校環境の整備が必要である。また、親の性に対する価値観や捉え方が子どもに影響することから、高校生の親たちが「GID」をどのように捉えているかを把握することも重要である。しかし、高校での GID 高校生に対する詳細な調査、一般高校生やその親の「GID」や「性的マイノリティー」の捉え方、受け入れに対する考えについての調査はない。以上より、本研究では、一般高校生と親の「GID の捉え方」・「GID 高校生の受け入れ」と、「GID 高校生自身と親がどのようなことを望んでいるか」の双方向から調査を行い、GID 高校生を受け入れる学校環境整備と GID 高校生の親への支援を可能とする指針を作成することをめざす。

2. 研究の目的

- (1) 一般の高校生と親の「GID の捉え方」と「GID 生徒の受け入れに対する考え」を把握する
- (2) GID 当事者から高校時代での必要なサポートを把握する
- (3)(1)(2)の結果から GID 高校生およびその母親への援助方法を導き出す

3. 研究の方法

(1) Web による一般の高校生とその親への調査

対象者は、日本リサーチセンターに登録している親子に調査の説明書を Web により提示し、協力の得られた高校生(1 年生・2 年生)とその親 329 組である。

調査は、高校生とその親に対して「GID 生徒に対する抵抗感や関心」、「GID についての情報の有無とその方法」、「周囲の GID の存在」、「GID 生徒が高校にいる際の学校側への要望」などの設問と、高校生には「友人からのカミングアウト時の対応方法」、親には「子供からの GID のカミングアウト時の対応方法」などの設問を加えて Web により行った。

分析は、各質問項目の記述統計ならびに高校生と親の GID 生徒の受け入れの抵抗感と関連する項目を²検定(有意水準は 5%)により確認した。本調査は研究代表者が所属する大学の研究倫理委員会の承認(H2017002)を得て実施した。

(2) GID 当事者へのインタビュー調査

対象者は、GID 当事者 5 名であり、対象者は、GID 当事者グループの代表者を通じて、対象となる当事者へ本研究の概要の説明および協力依頼をしてもらい、研究協力の意向を示した者に、個別に連絡を取った。プライバシーが保たれる個室で研究者が直接書面を用いて説明を行い、同意書を交わした上でインタビューを行った。インタビューは、高校時代を想起してもらい面接ガイドを用いて半構造化面接法で行い、許可を得て録音した。得られたデータから逐語録を作成した。調査内容は、「GID について、高校や生徒への公表の状況」、「GID について、高校や生徒に公表することの意思」、「高校生活において困っている(困った)こと」、「高校側(先生等)に望むこと」、「生徒、クラスメイトに望むこと」、「GID 当事者の親への公表の状況」、「GID 当事者が認識している親が抱えていた困りごとまたは抱えている困りごと」、「GID 当事者が認識している親が高校や生徒に望むことまたは望んでいること」である。

分析は、逐語録から上記調査項目の視点に沿って、それらに関する語りについて文脈を損なわないように抽出し、その内容を解釈・要約した。それらを類似性に従いまとめた。本研究は研究代表者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認(H2018017)を受けて実施した。

(3) GID 高校生およびその母親への援助方法

(1) および(2)の結果から、研究者間で GID 高校生およびその親への必要な援助項目をそれぞれの視点で複数回検討し、明確化した。

4. 研究成果

(1) WEB による高校生とその親の調査

本調査は、一般高校生 329 名、親 329 名より回答を得た。その内訳は、男子生徒 150 名(45.6%)、女子生徒 179 名(54.4%)、父親 164 名(49.8%)、母親 165 名(50.2%)であ

った。「GID 生徒の受け入れに抵抗」が「ある」と回答した高校生は 42 名 (12.8%) であった。親は 52 名 (15.8%) が「ある」と回答したが、「GID の人に対する抵抗」は 114 名 (34.7%) であった。「GID に関心」が「ある」高校生は 58 名 (17.6%)、親は 66 名 (20.1%) であった。「GID について知っているか」について、高校生は「知っている」147 名 (44.7%)、「内容は知らないが聞いたことがある」160 名 (48.6%) であり、親は「知っている」232 名 (70.5%)、「内容は知らないが聞いたことがある」86 名 (26.1%) であった。「GID の情報について得たことがあるか」については、「得たことがある」と回答した高校生は 101 名 (30.7%) であり、親は 101 名 (30.7%) であった。「情報の入手先」は、高校生では「テレビ、新聞」74 名 (73.3%)、「スマートフォン、パソコン」35 名 (34.7%)、「学校での授業」31 名 (30.1%) の順であり、親は、「テレビ、新聞」85 名 (84.2%)、「スマートフォン、パソコン」29 名 (28.7%) の順であった。「高校から GID の生徒について説明を受けたいか」については、「受けたい」と回答した高校生は 113 名 (34.3%) であり、親は 110 名 (33.4%) であった。「GID 生徒の受け入れに際し高校に対応して欲しいこと」は、高校生では「使用するトイレの指定」169 名 (51.4%)、「使用する更衣室の整備」148 名 (45.0%) の順であり、親では「GID についての知識の提供」186 名 (56.5%)、「修学旅行など宿泊を伴う行事での配慮」152 名 (46.2%) の順であった。「友人からの GID のカミングアウト」について、「自分ひとりで受け取ることができない」と回答した者が 160 名 (48.6%) であった。高校生に対する「GID 生徒と友人になれるか」の質問には、67 名 (20.4%) が「そう思う」、184 名 (55.9%) が「どちらかといえばそう思う」、23 名 (7.0%) が「そう思わない」と回答した。親に対する「子供が GID 生徒と友人となることの抵抗」についての質問には、55 名 (16.7%) が「抵抗ある」と回答し、274 名 (83.3%) が「抵抗ない」と回答した。高校生と親それぞれにおいて、「GID の関心」と「高校から GID 生徒の説明を受けたい」に有意な関連性を認め ($p < 0.05$)、GID に関心がない者は高校からの説明は必要ないと回答していた。

(2) GID 当事者ヘイインタビュー調査について

GID 当事者 5 名は全員 Female to Male であった。自分の性に違和を感じ始めたのは、小学生または中学生であり、そのきっかけは、恋愛対象が同性の女性であったことや、女子用の制服を着ることへの抵抗であった。また、全ての対象者が、女子用の制服の着用には抵抗感を持っていた。「GID のカミングアウト」については、2 名が高校 1 年生でカミングアウトし、友人の勧めや当事者を理解していた友人の存在がカミングアウトにつながっていた。一方、カミングアウトできなかった 3 名は、「誰にも言えない孤独感みたいなのはありました(A)」、「女性として生きるしか仕方ないとカミングアウトできなかった(B)」など孤独や諦めを感じていた。高校で困ったことについては、「自分がブラジャーをしていること自体がすごくいやで、それを見られるのも嫌だった(A)」、「修学旅行のときは大浴場じゃなくて、部屋のお風呂にこっそりと入った(B)」、「トイレに困りました。女子の個室を使うしかなかった。多目的が欲しかった(E)」など他の女子との同じ行動に違和感をもっていた。高校側(先生など)に望むことは、「高校の先生は皆知っていた。そしてその都度どのようにしたいかの希望を聞いてくれました。とても恵まれていたと考える(E)」、「女らしさは求められたくない(D)」と教員の接し方についての意見がみられた。

親へのカミングアウトは、4 名が行っていた。1 名が高校時代、1 名が高校卒業時、2 名が大学入学後であった。カミングアウトした 4 名の全ての母親が、受け入れるために時間が必要であったことを述べていた。一方で、大学でカミングアウトした者は、成人式の着物や化粧品に苦痛を感じていた。

(3) GID 高校生およびその母親への援助方法を導き出す

(1)(2) を基にして、必要な援助内容を考えた。1. 高校の制服については、私服にするかまたは、男女兼用のスラックスとする必要がある。2. 入学時にカミングアウトできる環境づくりが必要である。その環境づくりとしては、以下の 4 点が考えられる。1) 入学時のガイダンスでは、GID について知識を提供する。このことで当事者のカミングアウトおよび受け入れる高校生の抵抗感の軽減に繋げる、2) 当事者のプライバシーを確保するため調査用紙による確認をおこなう、3) 教職員も GID についての正しい知識を習得する、4) 保護者が GID の知識を習得できる研修会を实践する。3. 周囲に対するカミングアウトの有無に関係なく当事者が孤立しないように援助する。4. 当事者用のトイレや更衣室の環境を整える。5. 教職員から一方的に男性らしさ、女性らしさを過度に求めない。

<引用>

1. 矢野里佳ら：福岡大学病院における性同一性治療の現状と症例について、福岡大紀要，34(3)，233-239, 2007.
2. 阿部輝夫：性同一性障害について、順天堂医学，52, 55-61, 2006.
3. 文部科学省：学校における性同一性障害に関わる対応に関する状況調査，2014.
4. 山根望ら：性同一性障害(GID)に関する心理的研究の近年の動向，山口大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要，21, 231-247, 2006.
5. 杉浦郁子：「性同一性障害」概念は親子関係にそんな経験をもたらすか-性別違和感をめぐる経験の多様化と概念の変容に注目して，家族社会学研究，25(2)，148-160, 2014.

6. 藤井徹也ら：基礎看護技術演習での性同一性障害学生受け入れに関する調査, 医学と生物学, 157(6), 1271-1277, 2013.
7. 荘島幸子：性別の変更を望むわが子からのカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し, 発達心理学研究, 21(1), 38-91, 2010.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 1件)

藤井徹也、篠崎恵美子、中山和弘、大林実菜、工藤美子、高校生とその親の性同一性障害の受け入れに関する調査、日本看護科学学会第38回学術集会、2018

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：菊地美帆
ローマ字氏名：KIKUCHI, Miho
所属研究機関名：常葉大学
部局名：健康科学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：00553322)

研究分担者氏名：工藤美子
ローマ字氏名：KUDO, Yoshiko
所属研究機関名：兵庫県立大学
部局名：看護学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：40234455)

研究分担者氏名：中山和弘
ローマ字氏名：NAKAYAMA, Kazuhiro
所属研究機関名：聖路加国際大学
部局名：大学院看護学研究科
職名：教授
研究者番号(8桁)：50222170)

研究分担者氏名：篠崎恵美子

ローマ字氏名：SHINOZAKI, Emiko
所属研究機関名：人間環境大学
部局名：看護学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：50434577）

研究分担者氏名：大林実菜
ローマ字氏名：OBAYASHI, Mina
所属研究機関名：人間環境大学
部局名：看護学部
職名：助教
研究者番号（8桁）：80590009）

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。